慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：ベルナール・ライール著(鈴木智之訳)『複数的人間：行為のさまざまな原動力』法政大学出版局、2013年
Sub Title	
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.130- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：ベルナール・ライール著『複数的人間』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：ベルナール・ライール著（鈴木智之訳）

『複数的人間――行為のさまざまな原動力』法政大学出版局、2013 年

村井　重樹

フランスの社会学者ピエール・ブルデューは 2002 年にこの世を去った。ブルデューが社会学に残した偉大な足跡の数々は、すでに誰しもが認めるところである。しかし彼自身、その一連の研究によって社会学内に確固たる地歩を占めたといえる反面、たえずその争点ともなるような存在であり続けてきた。彼の死後 10 年以上が経過した今もなお、ブルデュー社会学は、社会学者たちにとって、やはりそうした争点のひとつとなりながら、数多くの示唆を与え続けているように見える。こうして現在、ブルデューの遺産から示唆を得た社会学的研究を指して「ポスト・ブルデューの社会学」と呼ぶことのできる潮流がもし仮に存在しているとするならば、本書『複数的人間』（原著 1998 年）の著者ベルナール・ライールをその急先鋒のひとりに数え挙げたとしても、異論を唱える者はいないであろう。本書は、著者がブルデュー社会学との真摯な格闘の末に生み出したブルデュー批判の書であると同時に、そうした批判に終始しない、次なる展開の一歩を踏み出そうとするライール社会学の新たな宣言の書でもある。

本書の立場は明確である。振り返れば、フランス社会学において（必ずしもフランス社会学に留まるものではないかもしれないが）、ブルデューは、つねに毀誉褒貶相半ばする存在であった。しかし著者はそのいずれにも与そうとはしない。なぜなら著者は、ブルデュー社会学は「時に毛嫌いされ（さらには無視され）、時に崇め奉られてきた」が、「前者のような完全に否定的な態度のことはひとまず措くとしても、称賛もまた同様に科学のあり方にふさわしいものでない」（本書 p37、以下本書からの引用・参照はページ数のみ記す）と考えるからだ。ではブルデュー社会学に対していかなる立場を取るのか。その際、著者は「ブルデューとともに、同時にブルデューに抗して」（37）思考することを選ぶ。この著者の立場は、ブルデュー社会学の「批判的継承」と形容することのできるそれである。

本書は、一貫してブルデューのハビトゥス理論をターゲットに考察を進めている。そこで著者がブルデューに対して求めていること、それは彼のハビトゥス理論の適用範囲を科学的に厳格なものにすることにほかならない。著者は、ブルデューのハビトゥス理論は「多くの場合ばらばらに研究されている実践の多様な次元を、統一的な形で構成し、理解すること」に貢献しているが、一方でその見方が「あまりにも一面的に、ハビトゥスの『体系的』で『統合的』な側面を強調することにつながる」と警戒を促している（47）。著者によれば、こうした「均質で一貫した性向ないし図式のシステムを備えた行為者と関わりうるためには、必ずしもつねに整っているわけではない、むしろ例外的にしか充足されない、きわめて特殊な社会的条件が必要である」（58）。著者はこのことを、さまざまな社会学的研究（自身のそれまでの経験的成果も

村井重樹「書評：ベルナール・ライール著『複数的人間』」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）130-132 頁

含め）だけでなく、社会言語学的研究や心理学的研究なども柔軟に駆使し、多様な角度から執拗に検討していく。これによって著者は、ブルデューのハビトゥス理論において「間違いなく価値あるもの、いうまでもないと思われていた事柄の一切」（323）が不動の前提ではないことを発見する。そしてブルデューが満足な検証を経ずに素通りしてしまった問い、すなわち「置き換え可能性とは何か。転移可能性とは何か。性向による説明とは何か？　文化的遺産とは何か？　文化資本の伝承とは何か？　図式とは何か？　性向の体系とは何か？　実践の生成の定式や統一化の原理とは何か？　客観的構造の内面化とは何か？　社会構造の身体化とは何か？」（323）をそもそもの問いとする地点から自身の社会学的営みを出発させようと企てる。こうして著者は、行為者の「均質性」と「単一性」を前提とし、あたかもそれが普遍的な適合性をもつかのように示されるブルデューのハビトゥス理論が、その実きわめて社会 - 歴史的条件に制約された視点からわれわれの社会生活を語るにすぎない特定の適合性をもつ理論であることを論証している。この著者の手捌きは非常に鮮やかで、その正確なところを求めるべく、ブルデュー自身のテクストを繰り返し紐解きつつも、その度に煙に巻かれるような感を抱いてきた評者にとって大いに説得力をもつものであった。

このように本書では､ブルデューのハビトゥス理論の諸条件がことごとく切り崩されていく。けれども、だからといって著者はその含意を全面的に打ち捨てようとしているわけではない。言い換えれば著者は、ハビトゥス概念の核心ともいうべき行為者の「身体化された過去」を決して手放そうとはしないのである。その意味で著者は相変わらずブルデューの後継者なのだということができる。ところが著者にしてみれば、ブルデューのハビトゥス理論には、身体化された過去の均質性と単一性という過剰な前提が据えられてしまっている。そこで著者は､「複数の社会的世界の中におかれた（個人の）身体は、不均質な、しばしば矛盾をはらんだ社会化の原理にしたがい、これを身体化するのだ」（68）と述べ、「不均質で、場合によっては対立しあい矛盾しあう習慣（行為の図式）を備えた、相対的に統一性を欠いた個人行為者」（68）に、自身の社会学の展開可能性を見いだそうとする。それは本書において「心理学的社会学」の構想――本訳書冒頭に配置された 2009 年付けの英語版序文では、「個人レヴェルの社会学」と呼び直されており、現在ではこの語が使用される――として結実していく。著者によれば、この構想は「さまざまに異なる場面や文脈や力と闘争の場などを横断していく個人を研究するということ、それは、個人化された、身体化された、内面化された形態において社会的現実を研究するということ」（324）を主眼とする。この主張には、しばしばブルデューが行為者を、社会集団や社会的カテゴリーに統計的な形で結びつく属性に還元することによって、社会的世界のいささか戯画的な像を描いてきたことに対する著者の強い違和が示されているといえるだろう。それよりむしろ著者は､「個人間の行動の多様性」や「行動における個人内の多様性」を自身の考察対象とし、さまざまな社会 - 歴史的条件のもとで個人が形成する「社会的なものの個別的襞」（336）、すなわち行為者という「把握されるべき最も複雑な社会的現実」の丹念な再構成をスタート地点に置くことに可能性を見るのである。これこそ著者が、ブルデューのハビトゥス

理論を換骨奪胎した末に導き出した新たな方法論的要求であり、そこには「複数的行為者」を基盤にして社会的世界を明らかにするための社会学的プログラムが――素描段階にとどまるとはいえ――強い意志をもって書き込まれているのである。

著者の社会学の構想に対しては、いくつかの反発もあるようだ。その点については著者自身が英訳版序文で触れているため、ここでは評者の感想めいたものを簡単に記しておくことにしたい。以前から評者は本書に意義を見いだし、論文等でたびたび言及する機会をもってきた。今回、本訳書で改めて読み直したわけであるが、著者の「複数的行為者」は、ブルデューのハビトゥス理論との対比において、たしかに新鮮で、社会的世界の分析のすぐれた転換点となりうるものとして十分に評価できると感じられた。ただし、視野を少し広げて社会学史全体に目を向けてみるならば、ジンメルやエリアスは、こうした「複数的行為者」に着目した先駆的社会学者であるということが可能で、著者の「複数的行為者」が、これら社会学的系譜といかなる関係に立つのかという思いが頭をかすめた。ブルデューという枠をいったん外し、社会学史の中に置き直してみることで、著者の「複数的行為者」は、よりくっきりとした像を結ぶかもしれない。そして、著者の企図が「個人と社会の関係」という社会学の古典的問題に足を踏み込むことになる以上、ブルデュー社会学や従来の社会学に対して、著者が両者の線引きをいかに再設定するのかという問題もさらに問われるべき課題となろう。とくに、ブルデュー社会学をハビトゥス理論から切り崩した先に、社会構造（ブルデューでは「場」）の問題がどのように捉え直されることになるのか、また後景に退いたかのように見える権力や支配の問題は、著者の社会学においていかなる位置をもつに至るのかといったことは、いっそう明確にされるべき課題であると思われる。

本書で開示された「心理学的社会学」（個人レヴェルの社会学）のプログラムは、著者の活発な研究活動のなかで以降も力強く展開されている。『諸個人の文化（*La culture des individus*）』（2004 年）、『フランツ・カフカ（*Franz Kafka*）』（2010 年）、『複数的世界（*Monde pluriel*）』（2012 年）等々の著作は、いずれもブルデューの問題設定を正確になぞりつつも、著者独自の視座を遺憾なく発揮し、本書のプログラムの輪郭をよりいっそう際立たせるものとなっている。管見の限り、著者の一連の研究は、フランス社会学の文脈を超え、「高度に分化した社会」（20）における実践の社会学的分析に少なくない影響を及ぼし始めてもいる。その意味でも、端緒となる本書を抜きにして、「ポスト・ブルデューの社会学」を語ることはできないと思われるのである。

最後に、訳書としての本書に一言触れておけば、全体的に非常に読みやすい訳文に仕上がっているうえ、訳者自身による丁寧な訳注も付されており、あわせて本書の理解に一役買っていると思われる。こうしたすぐれた翻訳でライール社会学が日本に紹介されたことを喜ぶとともに、これを契機に、本書をめぐって、ひいてはブルデュー社会学をめぐってさまざまな議論が巻き起こることを期待したいところである。

（むらい　しげき　慶應義塾大学ほか非常勤講師）